

学位論文審査の要旨

学位申請者	安原 道子 比較社会文化学専攻2016年度生		論文題目	長崎の「ぶらぶら節」研究—昭和初期にレコード化した2人の芸妓から現代への音楽的伝承—	
審査委員	主 査:	永原 恵三 教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 :	否
	副 査:	神田 由築 教授		「否」の場合の理由	
	副 査:	井上 登喜子 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む	
	審査委員:	中村 美奈子 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある	
	審査委員:	岡部 芳広 教授 (相模女子大学)		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている	
学位名称	博士 (人文科学)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
(英語名)	(Ph. D. in Musicology)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について	

学位論文審査・内容の要旨

この論文は、長崎市に昭和初期から現代に至るまで伝承されている「ぶらぶら節」を対象として、その音楽的側面で、どのように変化と固定が生じながら、現代に至る過程で生じた音楽的伝承の様相を明らかにすることを目的としている。ぶらぶら節は、昭和初期に長崎の2人の芸妓、凸助と愛八の唄によりレコード化されたことで、メディアを通じて多くの人びとに聞かれるようになった唄であり、そして、現代もお座敷唄としてのみならず、長崎市諏訪大社の秋の大祭「くんち」の演目として演奏され続けている。

1) 研究方法と概要: 研究方法は、①史料研究、②二つの「ぶらぶら節」の音源から旋律の数値化と五線譜化によって、凸助、愛八それぞれの演奏の相違点と共通点を比較、③長崎「くんち」のフィールドワークによって、「ぶらぶら節」の音楽的継承の様子を考察、④山口修氏の脈絡変換の理論との照合により、「ぶらぶら節」のレコード化から現代に至るテキストとコンテキストの関係を考察、などである。⑤長崎、熊本などNHKラジオ放送開局記念の番組などから、それぞれの地域にある検番の音楽的役割とその中の凸助と愛八の位置などを、新聞記事の史料研究から導き出した。こうした複数の研究方法を総合することによって、長崎の花街でお座敷唄としてうたわれていた「ぶらぶら節」が、お座敷という閉じた空間から、レコード化によって、長崎のみならず全国的に公開された唄となり、その後、戦後になって、昭和35年に初めて「くんち」によって取りあげられたことを契機として、諏訪大社の奉納踊りの演目へと変化し、公開の場で演奏される歌へと変化し、現代に至っていることが明らかになった。

2) 本論の評価できる点: ①「ぶらぶら節」は長崎市の多くの人びとの間で伝承され、共有されているうたであるが、昭和初期の2人の芸妓によるレコードが、調査協力者によりいずれも現存していることがわかり、それを端緒として、その当時の記録から現代に至るまでの、歴史史料を渉猟し、当時の信頼できる記述や花街での史料、また新聞記事を調査することで、「ぶらぶら節」が「くんち」に取りあげられて現在に至るプロセスをほぼ明らかにできたこと。②音源があったことで、数値化して、複数の分析方法を用いることで、凸助と愛八の演奏の相違点と共通点を、明確化したこと。つまり、これまでの伝承の中で凸助流と愛八流という区別がなされてきたが、それを実証的に検証し、音楽的相違として歌詞の音節の扱い方が両者で異なるものの、拍の取り方においてはいずれも明確で共通していることも明らかとなった。このことから、2人の芸妓が職業音楽的な訓練を受けていたことを示すことになった。また、さらに、2人が属している検番という組織に、職業としての音楽家を育成するシステムがあったことが推測され、今後への課題となった。③楽曲をテキストとしたときに、それをめぐるコンテキストとの関係は様々に変化したが、コンテキストの時間的経過の中で、テキストである「ぶらぶら節」自体は、奉納演奏ではその伝統が保たれると共に、所望踊りなどでは様々なテキスト自体の変化も見られ、3つの時期に分けて脈絡変換が生じたことが明らかとなった。3) 結論: 2人の芸妓の演奏は音楽的訓練を受けて、一定の技術を持った演奏であったことが明らかであり、それゆえに、「ぶらぶら節」の伝承での強い影響力と基盤になったと言え、俗曲であった唄が奉納の役割へと転ずる変化の様相を考えることができる。4) 審査の内容: 審査委員会は2020年12月10日と2021年1月21日に開催され、論の流れと脈絡変換の理論適用に課題があり、修正を求めた。それらが適切に修正されたので、2月8日に公開発表を開催した。東洋音楽学会関係者も出席し、意見交換の場となった。その後の最終試験では申請者が長年考えている民謡の研究の課題などが示唆された。審査委員会では、本論文を本学における学位論文として、博士(人文科学)、Ph. D. in Musicologyに相応しい、秀逸な論文であると、全員一致で判断した。